

# **天理市埋蔵文化財調査概報**

**昭和 61・62 年度**

**1988**

**天理市教育委員会**

## 発刊によせて

文化財は、わが国の歴史や文化などを正しく理解するため、欠くことのできないものであります。

一方、開発と埋蔵文化財の保存との調和を図りながら、発掘調査はより多く遺産を次の世代へ継承していく大きな使命をもって続けられています。

本概報は、昭和61年度、昭和62年度において天理市教育委員会が実施した調査のうち埋蔵文化財調査報告書によるものを除いて作成したものです。

内容については、昭和61年度は9件、1. 横本高塚遺跡（第2次）2. 堀田池遺跡（第2次）3. 在原遺跡（第3次）4. 平尾山遺跡（第2次）・平尾山2号墳 5. 長楽寺遺跡 6. 合場遺跡（第3次）7. 成願寺遺跡（第3次）8. 西殿塚古墳後円部隣接地 9. 鍋割古墳、昭和62年度は2件、1. 柳本藩邸跡（第3次）2. 小墓古墳の以上11ヵ所であります。

これらは、事前調査のため範囲が限定されているが一つ一つの調査の積み重ねによりそれぞれの遺跡の全容が解明されていくことであり、継続調査の成果を見守っていきたいものです。

最後にあたり発掘調査開始からここにまとめられるまで多くの方々のご指導、ご協力をいただいたことに対し深く感謝申し上げ、この概報が多く研究者へ貢献しながら次の展開を祈念するものであります。

昭和63年3月

天理市教育委員会

教育長 苅原 薫

## 例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が昭和61・62年度に実施した遺跡の発掘調査のうち、櫻本高塚遺跡、堀田池遺跡、在原遺跡、平尾山遺跡・平尾山2号墳、長楽寺跡、合場遺跡、成願寺遺跡、西殿家古墳後円部隣接地、鏡剣古墳—以上61年度と柳本落部跡、小墓古墳—以上62年度の計11か所の調査の概要である。国庫補助を受けて調査を実施した遺跡および民間開発に伴う調査の報告は別途報告書を作成した。
2. 調査は天理市教育委員会が実施し、現地は、櫻本高塚遺跡、在原遺跡は松本洋明、ほかは泉武が担当した。遺物の整理は、山田圭子、池本富美子、巽信子、梶山由美子、田淵弥生、吉村とも子があたった。
3. 本概報の執筆は調査担当者が分担し、櫻本高塚遺跡の出土遺物の執筆は福島永（奈良大学）、在原遺跡の出土遺物の執筆は近江俊秀（奈良大学）を行い、編集は泉が行った。

## 目 次

### 昭和61年度

1. 横 本 高 塚 遺 跡 (第2次) .....	(松本) ... 2
2. 沼 田 池 遺 跡 (第2次) .....	( 泉 ) ... 6
3. 在 原 遺 跡 (第3次) .....	(松本) ... 7
4. 平 尾 山 遺 跡 (第2次) · 平 尾 山 2号墳 .....	( 泉 ) ... 13
5. 長 葉 寺 跡 .....	(〃) ... 22
6. 合 場 遺 跡 (第3次) .....	(〃) ... 23
7. 成 願 寺 遺 跡 (第3次) .....	(〃) ... 24
8. 西殿塚古墳後円部隣接地 .....	(〃) ... 25
9. 鍋 刀 古 墳 .....	(〃) ... 26

### 昭和62年度

1. 横 本 藩 邸 跡 (第3次) .....	( 泉 ) ... 29
2. 小 墓 古 墳 (付西乘鞍古墳立会) .....	(〃) ... 30

## 図版目次

図版 1. 棚本高塚遺跡	33
図版 2. 在原遺跡	35
図版 3. 在原遺跡	37
図版 4. 平尾山遺跡	39
図版 5. 平尾山 2 号墳	41
図版 6. 平尾山 2 号墳	43
図版 7. 平尾山 2 号墳	45
図版 8. 平尾山遺跡出土遺物	47
図版 9. 平尾山 2 号墳出土遺物(1)	49
図版10. 平尾山 2 号墳出土遺物(2)	51
図版11. 平尾山 2 号墳出土遺物(3)	53
図版12. 合場遺跡(第3次)	55
図版13. 成願寺遺跡	57
図版14. 西殿塚古墳後円部隣接地	59
図版15. 鍋割古墳	61
図版16. 柳本藩邸跡(第3次)	63
図版17. 小墓古墳	65
図版18. 小墓古墳	67
図版19. 小墓古墳	69
図版20. 西乘鞍古墳	71

## 挿 図 目 次

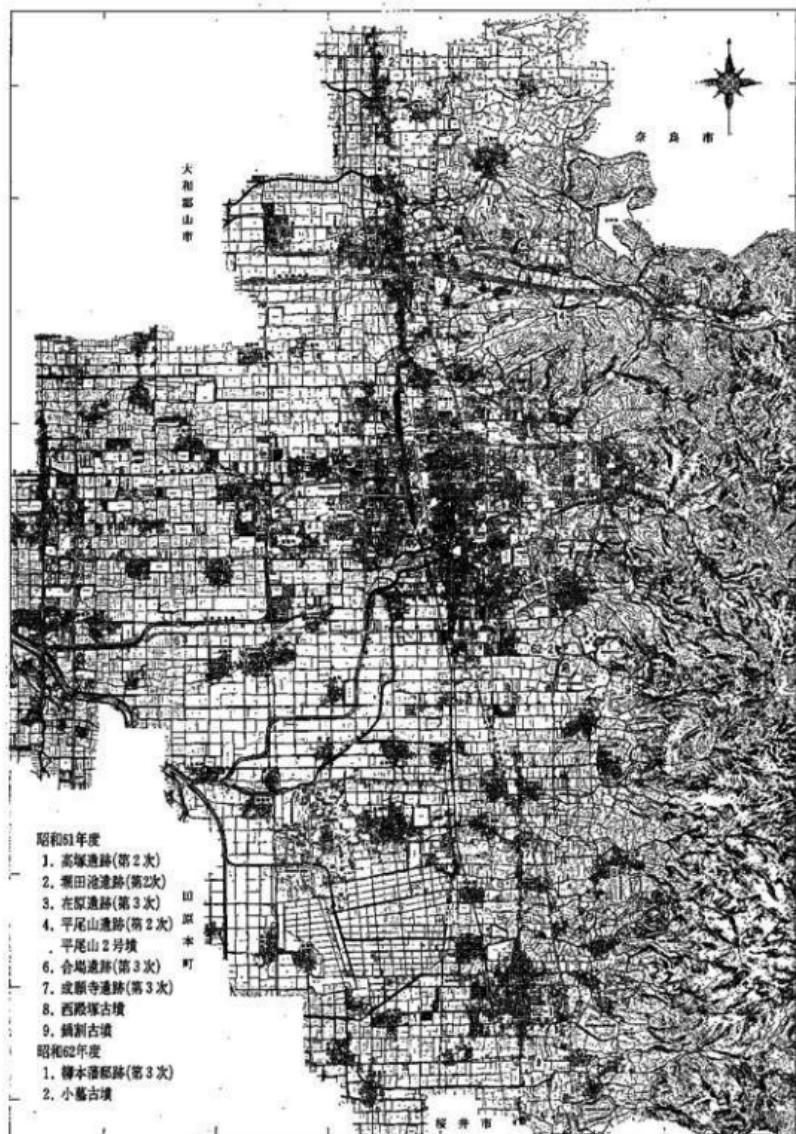
昭和61・62年度 遺跡調査地点	1
昭和61年度	
1. 横本高塚遺跡(第2次)	
図1. 遺跡の位置図(縮尺:10,000分の1)	2
図2. 調査区平面図(縮尺:400分の1)	3
図3. 横本高塚遺跡出土遺物	4
図4. 堀り割り出土の土馬(縮尺:3分の1)	5
2. 堀田池遺跡(第2次)	
図1. 堀田池遺跡調査地(縮尺:5,000分の1)	6
3. 在原遺跡(第3次)	
図1. 調査地点の位置図(縮尺:10,000分の1)	7
図2. 基本層序(縮尺:40分の1)	8
図3. 調査区平面図(縮尺:400分の1)	9
図4. 土器実測図(縮尺:3分の1)	10
図5. 土器実測図(縮尺:3分の1)	11
4. 平尾山遺跡(第2次)・平尾山2号墳	
図1. 平尾山遺跡と2号墳調査地(縮尺:5,000分の1)	13
図2. 2号墳測量平面図	14
図3. 2号墳遺物出土状況(縮尺:40分の1)	15
図4. 平尾山遺跡出土遺物(縮尺:3分の1)	16
図5. 2号墳石室出土遺物(1)(縮尺:3分の1)	18
図6. 2号墳石室出土遺物(2)(縮尺:3分の1)	19
5. 長楽寺跡	
図1. 基本層序(縮尺:20分の1)	22
図2. 長楽寺跡調査トレンチ	22
6. 合場遺跡(第3次)	
図1. 合場遺跡第3次調査地(縮尺:5,000分の1)	23
7. 成願寺遺跡(第3次)	
図1. 成願寺遺跡61・62年度調査地(縮尺:5,000分の1)	24
8. 西殿塚古墳	

図 1. 西殿塚古墳後円部隣接地調査地（縮尺：5,000分の1）	25
図 2. 調査状況図（縮尺：200分の1）	25
<b>9. 鍋割古墳</b>	
図 1. 鍋割古墳位置図（縮尺：5,000分の1）	26
図 2. 鍋割古墳出土遺物（縮尺：3分の1）	27

**82年度**

<b>1. 柳本藩邸跡（第3次）</b>	
図 1. 基本層序（縮尺：80分の1）	29
図 2. 柳本藩邸跡第3次調査地（縮尺：5,000分の1）	29
<b>2. 小墓古墳</b>	
図 1. 小墓古墳および西乘鞍古墳調査地（A・B）（縮尺：5,000分の1）	30
図 2. 小墓古墳出土埴輪（縮尺：3分の1）	31

昭和 61 年度



昭和61・62年度 遺跡調査地点

# 1 樺本高塚遺跡(第2次) —和爾町

## I はじめに

天理市の北部、櫟本町の市街地から東へ約1kmの地点に東大寺山古墳群が所在する。東大寺山古墳群は古墳時代前期の前方後円墳を主体とした標高134.2mの東大寺山を最高峰とする比高60m程度の古墳が群在した丘陵地帯であるが、すでに東大寺山古墳群の東側半分には、シャープ総合開発センターがあり、本来の景観がかなり損なわれている。

また丘陵上に立地する東大寺山古墳(図1-2 全長140m 前方後円墳)と赤土山古墳(図1-3 全長100m 前方後方墳) 丘陵の西側裾に立地する和爾下神社古墳(図1-4 全長110m 前方後円墳)と、櫟本墓山古墳(図1-5 全長55m 前方後円墳)があり、古墳の立地が丘陵上と低地側とに分れた独特な前方後円墳地帯である。

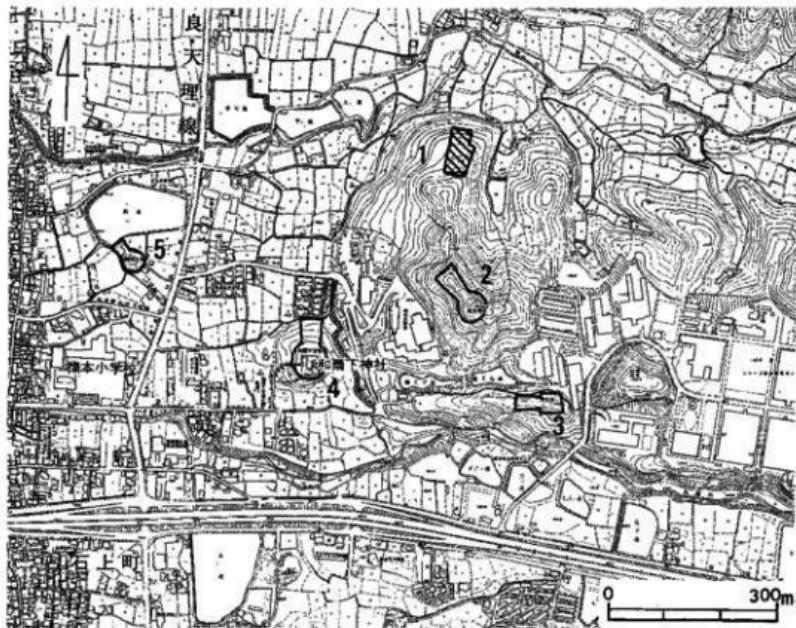


図1 遺跡の位置図(縮尺:10,000分の1)

櫻本高塚遺跡は、東大寺山古墳が立地する丘陵上の北端部に位置し、昭和57年の櫻原考古学研究所による試掘調査や昭和60年の天理教調査団による本調査によって古墳時代の堅穴式住居跡や建物跡の存在を確認している。今回の調査は同一地点の尾根筋上に立地していた古墳の調査を実施したものである。調査は、昭和61年4月16日から7月4日までおこなった。(図1-1)

## I 調査の概要

調査地点尾根上に南北70m、東西35mにわたって調査区を設定し、古墳の跡を2基検出した。また検出した古墳をそれぞれ櫻本高塚1、2号墳と仮称した。

### 櫻本高塚1号墳

調査区の中央部で検出した径9~20mの円墳で、墳丘の周囲に堀り割りを巡らしていた。堀り割りは丘陵の高所側にある南堀りの規模が大きく、検出幅10m、検出した深さ1mで遺物も墳丘の南側堀り内より多く出土し、また堀り内の堆積土を上層から最下層まで分層し遺物を取り上げた。

埋葬施設は、西側に開いた盗掘に伴う幅3m、奥行8mの穴があり、横穴式石室の痕跡と思われる。

### 櫻本高塚2号墳

調査区の北端部で検出した墳丘に伴う堀り割りの痕跡で、墳形や墳丘の大きさは不明である。出土した土器片から6世紀の古墳であったと思われる。埋葬施設は不明。

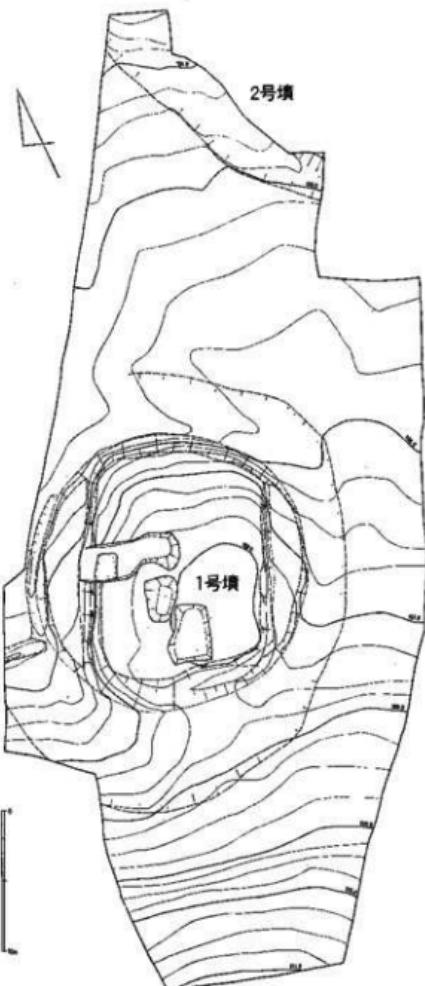


図2 調査区平面図(縮尺:400分の1)

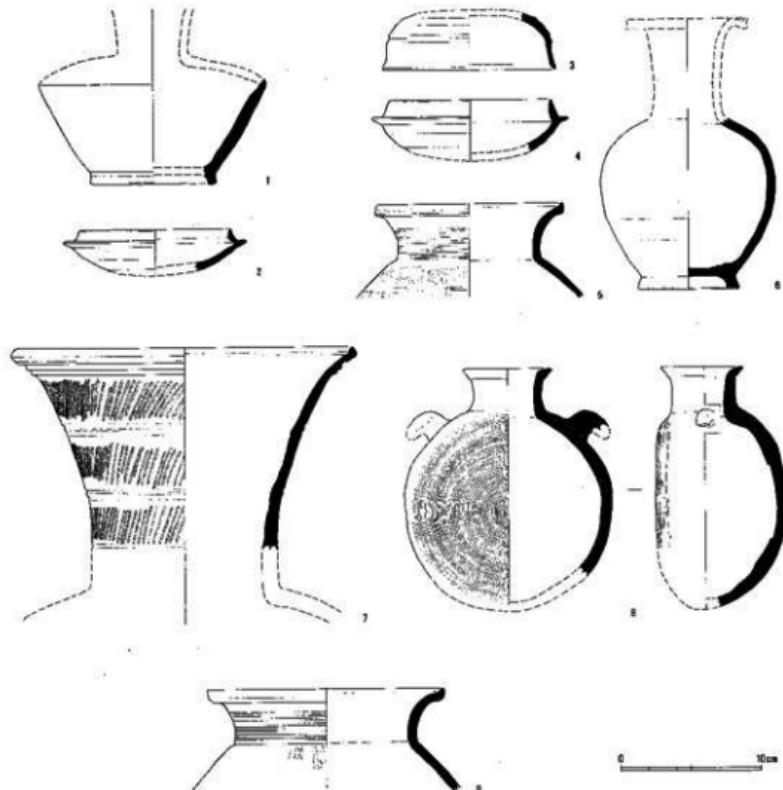


図3 横本高塚1号墳周濠出土遺物

### III 出土遺物について

#### 上層出土土器

須恵器長頸壺（図3-1） 口頸部と体部上半は欠損しているが、体部上半への立ち上がりおよび体部の張りより長頸壺と思われる。体部残存高7.4cmであり、最大径は16.2cm、高台径9.0cm、高台高0.9cmである。高台はあまり大きくはない。外面体部下半はヘラケズリのちヨコナデ調整、高台はヨコナデ調整である。時期としては8世紀前半である。

須恵器杯身（図3-2） 口径10.8cm、残存高3.0cmであり、体部下半が欠損している。外面体部下半は、反時計回り方向のヘラケズリ、上半および立ち上がりはヨコナデ調整である。色調は外面

青灰色、内面淡灰色である。時期は7世紀中頃である。

#### 中・下層出土土器

須恵器杯蓋（図3—3） 器形復原による口径12.4cm、残存高4.0cmであり、残存部分は少ない。口縁部と天井部の境は沈線で区画されている。調整は、外面口縁部より天井部下半はヨコナデ、天井部上半はヘラケズリであり、ケズリの方向は不明である。6世紀前半に位置づけられる。

須恵器杯身（図3—4） 器形復原による口径は、立ち上がりおよび体部上半はヨコナデ、体部上半はヘラケズリであるが、ヘラケズリの方向は不明である。色調は外面、内面共に淡灰色である。時期は6世紀後半である。

須恵器広口壺（図3—5） 口径13.3cm、残存高6.6cmである。口縁部より頸部上半はヨコナデ調整、頸部下半はカキ目、体部上部はタタキのちヨコナデ調整、その下にカキ目が施されている。時期は6世紀中頃である。

須恵器長頸壺（図3—6） 頸部は欠損している。体部最大径は12.5cm、残存高12cm、高台径7.1cm、高台高0.9cmである。体部は上半部に最大径をもつ球形であり、外面の上半はヨコナデ調整、高台はヨコナデ調整である。色調は外面明褐色、内面明茶灰色で、体部上半部には自然釉の付着がみられる。時期は、7世紀後半である。

須恵器広口壺（図3—7） 口径24cm、残存高14.1cmで、頸部は現存で三区画されており、区画された部分には横列点文を施している。色調は、外面暗灰色、内面明灰色である。時期は、7世紀中頃であろう。

須恵器提瓶（図3—8） 器形復原で、口径6.4cm、残存高17cmであり、鉤形の把手をもち、カキ目が両面に施されている。内面に接合痕が明瞭に認められている。色調は、外面、内面共淡灰色であり、6世紀中頃である。

#### 最下層出土土器

須恵器壺（図3—9） 口径17cm、残存高7.4cmであり、口縁部から頸部上半はヨコナデ調整、頸部下半はカキ目が施されている。体部はタタキのちヨコナデ調整であり、色調は外面淡灰色、内面青灰色である。時期は、6世紀中頃である。

（福島）

## IV まとめ

標本高塚遺跡の尾根筋上において2基の古墳を検出した。1号墳は、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とした円墳であった。2号墳は、堀り割りを検出したことだけでは墳丘部の調査は行なっていないため、開発事業の進みと並行して調査を実施してゆく予定である。

## 2 堀田池遺跡(第2次) — 蔵之庄町

### 1 はじめに

当該遺跡は、県遺跡地図8B-70にあたり、堀田池の北側にあたる。遺跡地内の農業用水路の南北の長さ約50mの改修に伴う事前調査を、昭和61年11月11日から15日にかけて実施した。

### 2 調査の概要

水路幅は約3mあるが、現水路の改修であるため、調査方法も限定され、深さも表土下60cmにとどまった。このため造構を検出するまでにはいたらなかった。出土した遺物は、須恵器片、土師器片、瓦器片など少量である。



図1 堀田池遺跡調査地 (縮尺: 5,000分の1)

### 3 在原遺跡(第3次) —石上町

#### Iはじめに

名阪国道(国道25号線)天理インターチェンジより西へ100mの地点に在原寺跡が推定されている。松尾芭蕉「笠の小文」貝原益軒「和州巡覧記」などに在原寺の記載があり江戸時代における在原寺の存在が知られている。その内容から現在の在原神社付近に在原寺が存在していたと思われる。また「寛文寺社記」に元慶四年(880)の在原寺創建が記されている。

在原寺跡に関する在原遺跡第1、2次調査がおこなわれているが、寺院跡に係る遺構は検出していない。調査は、昭和61年7月25日から8月25日までおこなった。

#### I調査の概要

##### 1. 基本層序

調査地点は標高73.9mの暗灰色土を耕土層とする畑地で、耕土層直下に灰色土床土層があった。



図1 調査地点の位置図(縮尺:10,000分の1)

黒塗り部が調査地点

床土層の直下、標高73.4mに茶灰褐色土層があり、その下淡茶灰色土層の上面で素振り溝遺構や井戸01・02、SD-02中世溝を検出した。

遺構を検出した淡茶灰色土層の下方には暗灰色粘土I・II層が堆積し、同層位より瓦器碗や土師皿が出土したが遺構はなかった。

暗灰色粘土II層の直下、標高72.5mには、かつて自然河道の水流の跡を示す灰色砂礫層が厚さ0.5~1mにわたって堆積し、直下に青灰色粘土層があった。第1調査区の北よりの地点では、灰色砂礫層をベースにした暗茶褐色粘土層の堆積があり、自然流路に伴う堆積層と思われる。

## 2. 遺 構

落ち込み（自然河道）、第1調査区から第2調査区にかけて検出した地形の落ち込みで、調査地の北側にある微高地から自然河道へ落ち込んでゆく傾斜地点を検出した。

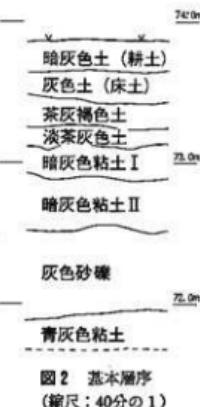
調査地点で検出した土層の内、青灰色粘土層や耕土、床土層以外は自然河道に伴う堆積層で、特に青灰色粘土層をベースにした灰色砂礫層は、調査区で落ち込みを検出した地点よりさらに北側へ広がっており、出土した遺物から検出した落ち込みが平安時代以降の地形に伴う状況と思われ、平安時代より以前の自然河道に伴う落ち込みは、さらに北よりの地点に残っていると思われる。

SD-01（自然流路）、第1調査区の北よりの位置で検出した、幅5m、深さ1mの東西方向に延びる流路で、自然流路と思われる。流路内には暗茶褐色粘土層が堆積し、同層内より黒色土器と土師皿が出土している（図4）。

SD-02（中世溝）、第1調査区から第2調査区にかけて検出した幅2.5~3m、深さ50~70cmの北東から南西方向に延びる中規模な大溝で、溝内には、溝上半に灰色粘砂層（上層）、溝下半に暗青灰色粘土層（下層）が堆積していた。下層よりIV段階の瓦器碗が出土している。

井戸-01、第1調査区の中央部よりやや北よりの地点で検出した遺構で、南北1.4m、東西1.1mの方形プランの井戸底に曲物枠が残っていた。井戸底はSD-01暗茶褐色粘土層を掘り込んでおり、曲物の外側に堆積していた埋土にSD-01に伴う土器片が混入していた。

井戸-02、第1調査区の井戸-01に隣接して検出した。径1mの円形プランの井戸跡で、井戸底には曲物を転用した井戸枠が残っていた。出土遺物はないが井戸-01と同時期の遺構と思われる。



## III 出 土 遺 物

### SD-01暗茶褐色粘土層出土土器

黒色土器碗 (A類 図4-8, 13, B類 図4-1, 2, 4-6, 9-12, 14-16) 黒色土器

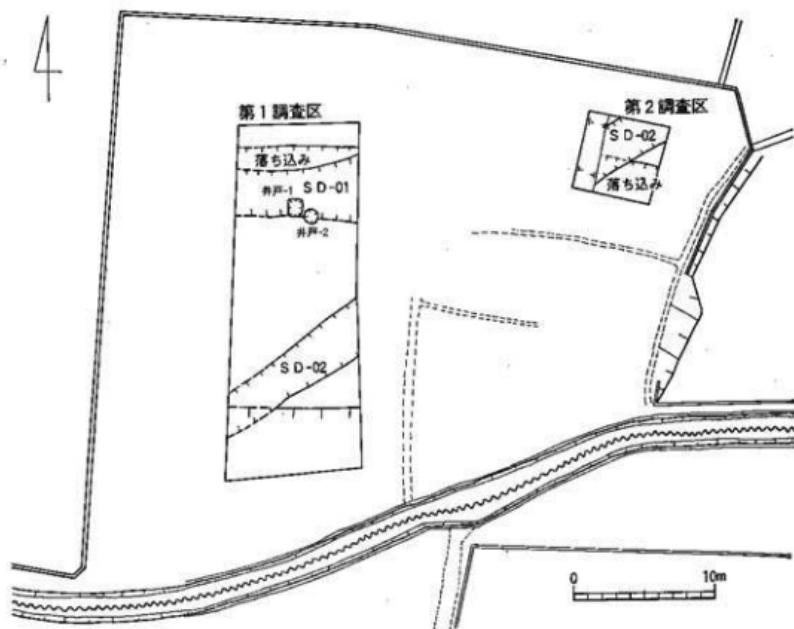


図3 調査区平面図(縮尺:400分の1)

椀には、A類、B類があり、いずれも、全面にヘラミガキを行っている。形態的には、直線的な体部を有するもの（図4-1, 4）と、広くたいらな底部と、強く屈曲しほば直線的に外反する体部と口縁部を有し、高台は、体部の屈曲際に、やや外開き気味にはりつけられるもの（図4-2），さらに、ほぼ半球形状の体部を有するもの（図4-5, 6）が存在する。また、高台は、外開きのものを一般とするが、ほぼ垂直にはりつけられているもの（図4-6, 13, 19）もあり、さらに、底部の屈曲際ににはりつけられるもの（図4-2, 6, 9, 11, 13, 15, 16）と、屈曲部分からやや内側にはりつけられるもの（図4-8, 10, 12, 14）の2つが存在する。また、口唇部についても、沈線を有するものと、丸くまとめたものがあり、さらに、体部下半に、断面三角形の突帶をめぐらすものもある。（図4-1, 2, 11）。時期は、その器形から、前栽遺跡井戸2, 3出土のものと同時期か、やや新しいものと考えられる。

土師器椀（図4-3, 7） 土師器椀は、いずれも、その形態、調整の点において、黒色土器椀との差異は認められず、両者の差は、焼しの有無のみである。また、黒色土器椀同様、体部下半に、断面三角形の突帶をめぐらすものもある。（図4-3）

土師皿（図4-18, 19） いずれも口径10cm、器高1.5cm前後の小皿で、いわゆる「て」字状口

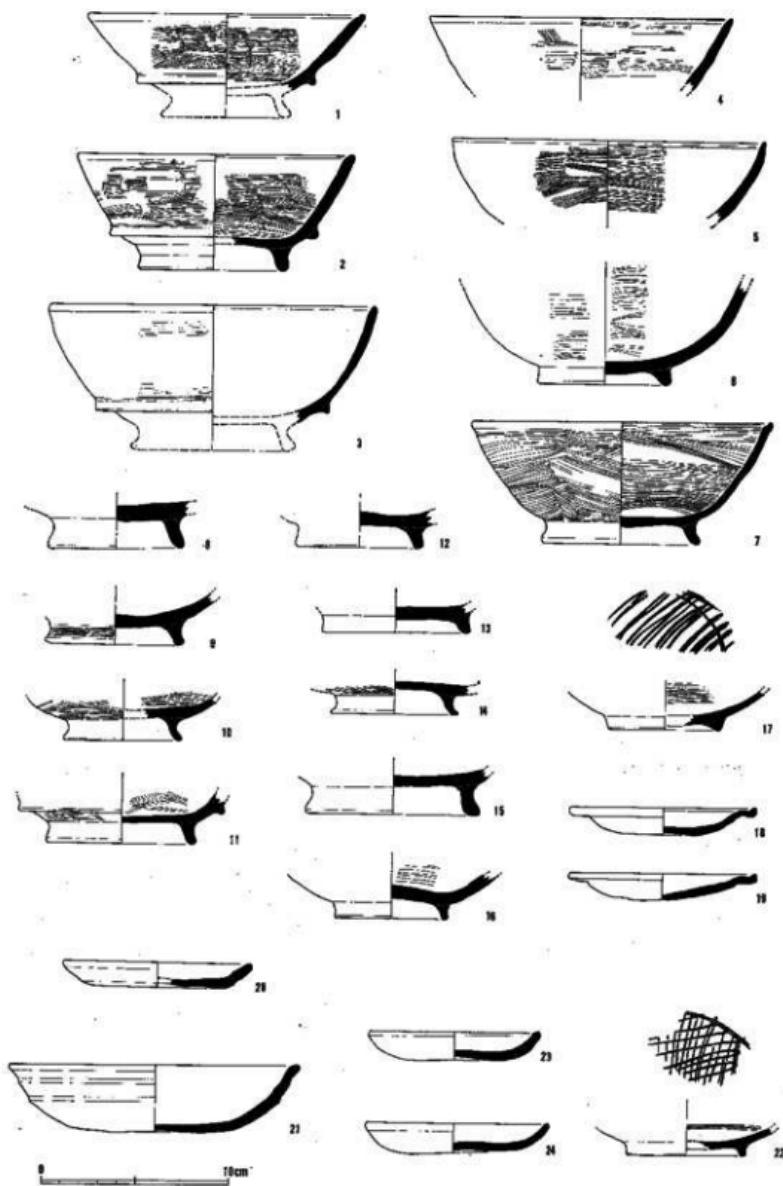


図4 土器実測図(縮尺: 3分の1)

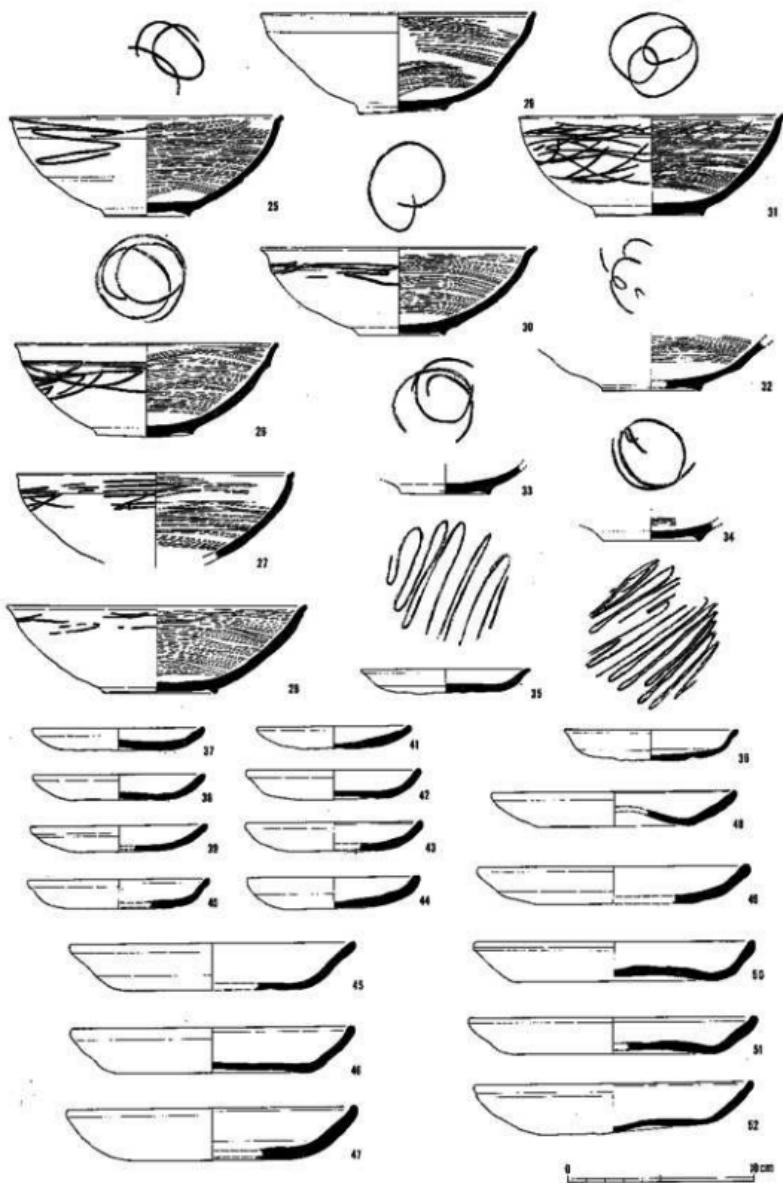


図5 土器実測図 (縮尺: 3分の1)

縁を呈す。

#### 井戸—01出土土器

土師皿（図4—20, 21） 土師皿には、口径10cmで、口唇部を丸くまとめ、内面底部をナデ、内外の側面にヨコナデを行っている小皿（図4—20）と、口径15.4cm、器高3.5cmとやや深手で、口唇部を外反させ、丸くまとめ、口縁部の強いヨコナデにより軽い稜がつく大皿（図4—21）とがある。

#### 暗灰色粘土 II 出土土器

瓦器碗（図4—22） 瓦器碗は、底部のみで、逆台形のしっかりとした高台を有し、見込み部の暗文は、斜格子状である。

土師皿（図4—23, 24） 土師皿は、いずれも口径10cm程度の小皿で、口唇部を丸くまとめている。

#### 暗灰色粘土 I 出土土器

瓦器碗（図5—25～34） 瓦器碗は、いずれも、川越編年3段階A～B型式の範疇で把えられるもので、形態的には、口径14.0～14.7cm程度で、丸みを帯びながら内凹する体部と、やや外反気味の口縁部を有し、口唇部に沈線を有するものを一般とするが、口径が16.0cmと広く、ほぼ直線的に外反する扁平な体部を有し、口唇部に沈線を持たないものもある。（図5—28）高台は、いずれも、断面三角形か、逆台形の小さなもので、見込み部の暗文は、連結輪状、もしくは、同心円状である。

瓦器小皿（図5—35, 36） いずれも、口径9cm程度で、内面及び、口縁部外面をヨコナデ、見込み部に、平行線状暗文を施す。

土師皿（図5—37～52） 土師皿には、口径9cm前後の小皿（図5—37～44）、14cm前後の大皿（図5—45～52）の2種がある。いずれも内面をヨコナデするが、口縁部外面の強いヨコナデにより、底部境に軽い稜をつけるもの、口唇部をつまみあげながらヨコナデする事により、口縁部下0.5cm前後に稜を持つものもある。また、底部は、ほぼたいらなものを一般とするが、上げ底状のものもある。（図5—48）(近江)

## IV まとめ

第3次在原遺跡の調査で、遺跡の南側を東西方向に流れていた自然河道の痕跡を検出した。自然河道は、現在の石上川の前身にあたる河跡と思われる。

自然河道より10～13世紀にかけての遺物包含層があり、13～14世紀頃から井戸や溝を掘り込んだ居住地域として利用されていたと思われる。

## 4 平尾山遺跡(第2次)・平尾山2号墳 —石上町

### 1 はじめに

当該調査地は、市道の拡張工事に伴う事前調査として実施した。平尾山遺跡は、1984年に天理教埋蔵文化財調査団によって調査が実施され、四面庇付の掘立柱建物や木棺墓が検出されて注目を浴びた遺跡である。そして、今回は、この建物の南側隅部が市道内に埋没していて、市道拡幅が企画された段階から、掘立柱建物の完全保存を目的として、市道を迂回させることが必要になってきた。このため、現市道の発掘は見合わせ、迂回部分の発掘調査を実施する方法をとった。

平尾山2号墳は、前記した平尾山遺跡を通る一連の市道拡幅に伴うものであるが、2号墳の東側は1号墳が既に遺跡地図に載せられた周知の古墳であり、大幅な変更はできないことは明らかであった。また、2号墳は、旧状が果樹園であり、墳丘状の隆起も確認できなかったことから、この部分での拡幅が計画されたわけである。そこで、約50m<sup>2</sup>程度を事前調査して、古墳の有無を確認した。

調査は昭和61年11月20日に開始し、昭和62年1月30日に終了した。

### 2 調査の概要

1. 平尾山遺跡 東西長47m、南北長11mで約500m<sup>2</sup>の調査区を設定した。地形は南からの緩斜



図1 平尾山遺跡と2号墳調査地 (縮尺:5,000分の1)

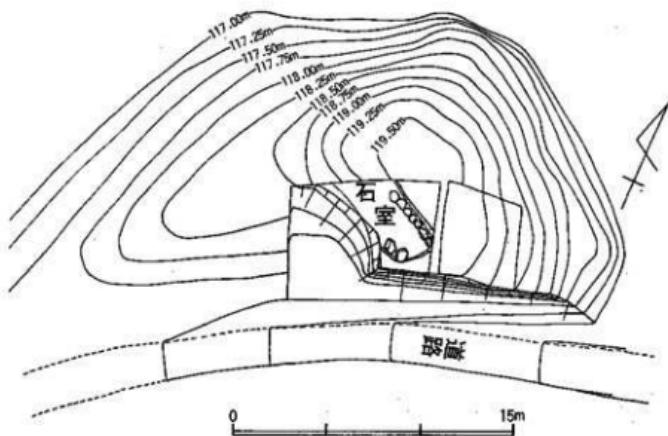


図2 2号墳測量平面図

面でしかも西へも少しづつ傾斜している。西へ約400mの地点は石上銅鏡の出土地である。調査前は果樹園として開墾されていた。

遺構面は東側が浅く、表土を取り除くと約20cmで地山面が露出し、遺構面を形成していた。西へ行くに従い遺構面は深くなり、西側では約1mである。この間の堆積土は、耕作土と黄灰色で粘性の強い2層があるだけである。第2層からは土師器、須恵器のまとまった資料を東端近くで検出したが、耕作土の除去を重機によっていたため、この土器群に伴う遺構は確認できなかった。1984年の調査では、墓壇をもつ木棺墓（7世紀前半から末ごろ）が検出されており、この土器群も土塚墓の可能性が強い。しかし、第2層を除去して精査した結果では基盤層までは土波が掘り込まれた痕跡は認められなかった。

第2層を除去すると、自然礫を多量に含む黄灰色の地山面が露出し、不整形の土波を54個所検出した。規模は長さ5m、幅1mの溝状のものから、径約70cmの円形を呈するものまであり、多様な形態を呈する。出土した遺物は、土坑1からサヌカイト片が3片出土したのみである。これらはいずれも表面の風化が顕著に認められ、縄文時代のものと推定される。他の土坑からは、遺物は出土しなかった。

#### 出土遺物

これらはすべて第2層から出土した土器群の一括品である。須恵器19点、土師器3点の合計21点である。

#### 須恵器（図4-1～19）

蓋杯（1～8）宝珠  
つまみ付きで、返りが  
内側につく同一形態の  
一括品である。大きさ  
にややバラエティーが  
あるものの、口縁部径  
は9.2～12cmと大きな  
バラツキはない。

杯身（9～16）15,  
16がやや大きいが、い  
ずれも蓋杯とセットに  
なるだろう。

高杯（17）小ぶりの  
形態を呈し、脚部も小  
さい。

平瓶（18, 19）18は  
頸部を失っているが、  
2個体とも同一形態を  
呈している。

土師器（図4 20～  
21）

高杯（20, 21）杯  
部、脚部ともやや形態  
を異にしている。

壺（22）把手付の  
小形壺である。小破片  
であるが、片手になる  
ものと考えられる。

以上のように、第2層から出土した土器群は、7世紀中葉を前後する時期に比定され、前回調査  
された一群の土坑墓のひとつと考えられる。

## 2. 平尾山2号墳

当古墳は市道によって切断された丘上にあり、東側には埴輪をめぐらす1号墳が隣接している。  
1号墳は直径約30mを測り、横穴式石室をもたず、やや古い時期の古墳であろう。2号墳の調査当

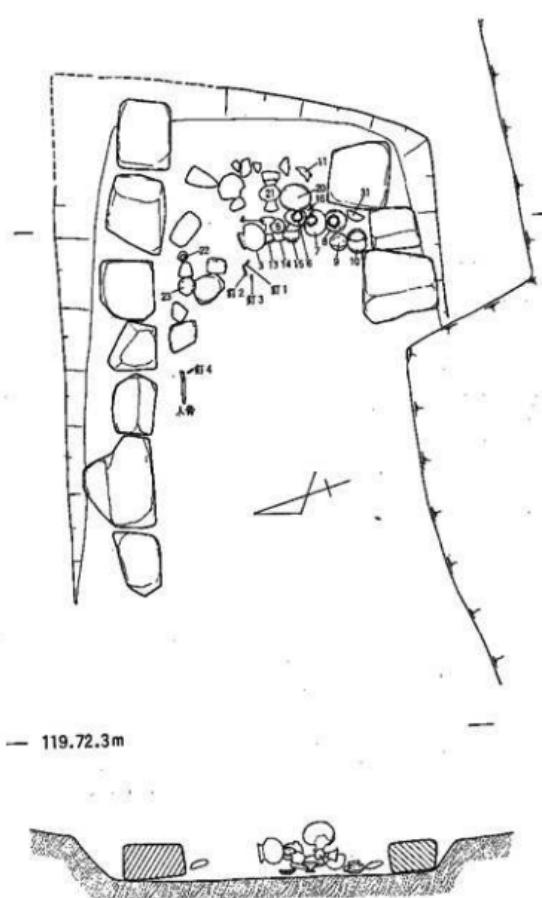


図3 2号墳遺物出土状況（縮尺：40分の1）

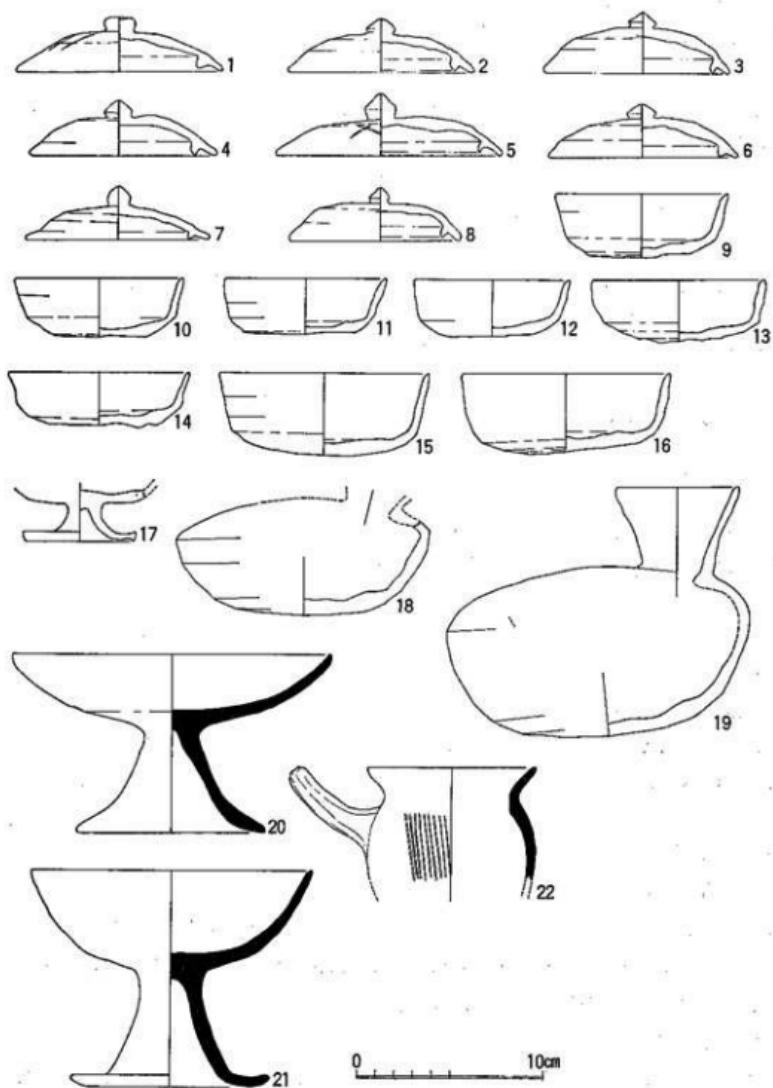


図4 平尾山遺跡出土遺物 (縮尺: 3分の1)

土器 番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	外 面 観	色調(内) (外)		胎 土
					内)	外)	
1	蓋杯	11.0	2.9	回転ナデ 回転ヘラ削り	明 青	灰 色	細かく0.1~4.0mm大石英, 0.1~1.0mm長石少量含む
2	"	10.0	2.8	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 青	灰 色	細かく0.1~2.0mm大石英, 長石。チャート少量含む
3	"	10.0	3.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明 青	灰 色	細かく0.1~1.5mm大石英, 長石少量含む
4	"	10.0	3.0	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 青	灰 色	細かく0.1~1.5mm大石英, 長石少量含む
5	"	12.1	3.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明 外) 浅黄	灰 味灰白色	細かく0.2~4.0mm大の石 英少量含む
6	"	10.0	2.8	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明 外) 明	青 灰	細かく0.1~5.0mm大石英, 長石少量。チャート1個 含む
7	"	9.8	3.0	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 浅黄 外) 浅黄	氣味明青 味灰白色	細かく0.5~2.0mm大石英 少量含む
8	"	9.2	3.0	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) オリーブ	反 灰色	細かく0.1~1.0mm大の石 英少量含む
9	杯身	9.2	3.5	回転ナデ	内) 青 外) 青	灰 灰	細かく0.1~3.0mm大の石 英多く、0.1~2.0mm長石 少量含む
10	"	9.0	2.6	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 暗	青 灰	細かく0.1~1.0mm大石英 長石少量含む
11	"	8.7	3.0	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 青	灰 灰	細かく0.1~4.0mm大石英, 長石少量含む
12	"	8.4	3.0	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 暗	青 灰	細かく0.1~0.5mm大の石 英、長石少量含む
13	"	9.4	3.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 浅青 外) 暗	青 灰	細かく0.1~1.0mm大の石 英、長石少量含む
14	"	9.7	2.8	回転ナデ	内) 明 外) 青	青 灰	細かく0.1~2.0mm大の石 英少量含む
15	"	11.2	4.5	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明 外) 明	青 灰	細かく0.1~2.0mm大の石 英、長石少量含む
16	"	11.2	4.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明 外) 灰	青 白	細かく0.1~4.0mm大石英, 長石少量。チャート1個 含む
17	高杯	底径6.0	2.7	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明 外) 青	オリーブ 灰	細かく0.1~0.5mm大の石 英、長石少量含む
18	平瓶	胴径13.5	6.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 青	灰 灰	細かく0.1~2.0mm大の石 英多く、長石少量。チャ ート1個含む
19	"	口径6.5 胴径16.2	13.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青 外) 青	灰 灰	細かく0.1~4.0mm大の石 英をやや多く、0.5~1.0 mm大の長石少量含む
20	土師器 高杯	口径17.0 底径10.2	9.5	ナデ	内) 明 外) 明	赤 赤	細かく0.1~2.0mm大石英, 長石少量。赤色酸化土粒, 鐵錆多く含む
21	"	口径15.0 底径10.6	11.5	ナデ	内) 橙 外) 橙	色 色	細かく0.1~2.5mm大の石 英、長石。寒母少量。赤 色酸化土粒多く含む
22	把手付壺	9.0	6.0	ナデ ハケ目	内) ぶ 外) 赤	い 褐	細かく0.1~2.5mm大石英 多く、0.1~1.0mm大の長 石少量含む

表1. 平尾山遺跡

初は、この古墳の後方部の可能性も考えられた。しかし、市道による崖面のそじの途中で石室の一部が露出したことにより、2号墳は単独で立地していることが判明した。そこで、頂上部に調査区を設定して遺構の検出を開始した。頂上部の東側では表土直下から地山面が露出したが、西側のトレンチでは、約1mにわたって搅乱土の堆積があり、これらをすべて除去した。この結果、遺存状況が悪いものの、西へ開口する横穴式石室を検出することができた。

石室は岩屋谷の方向に開口し、その規模は、玄室長約3.3m、幅約1.5mである。石材は大半が持

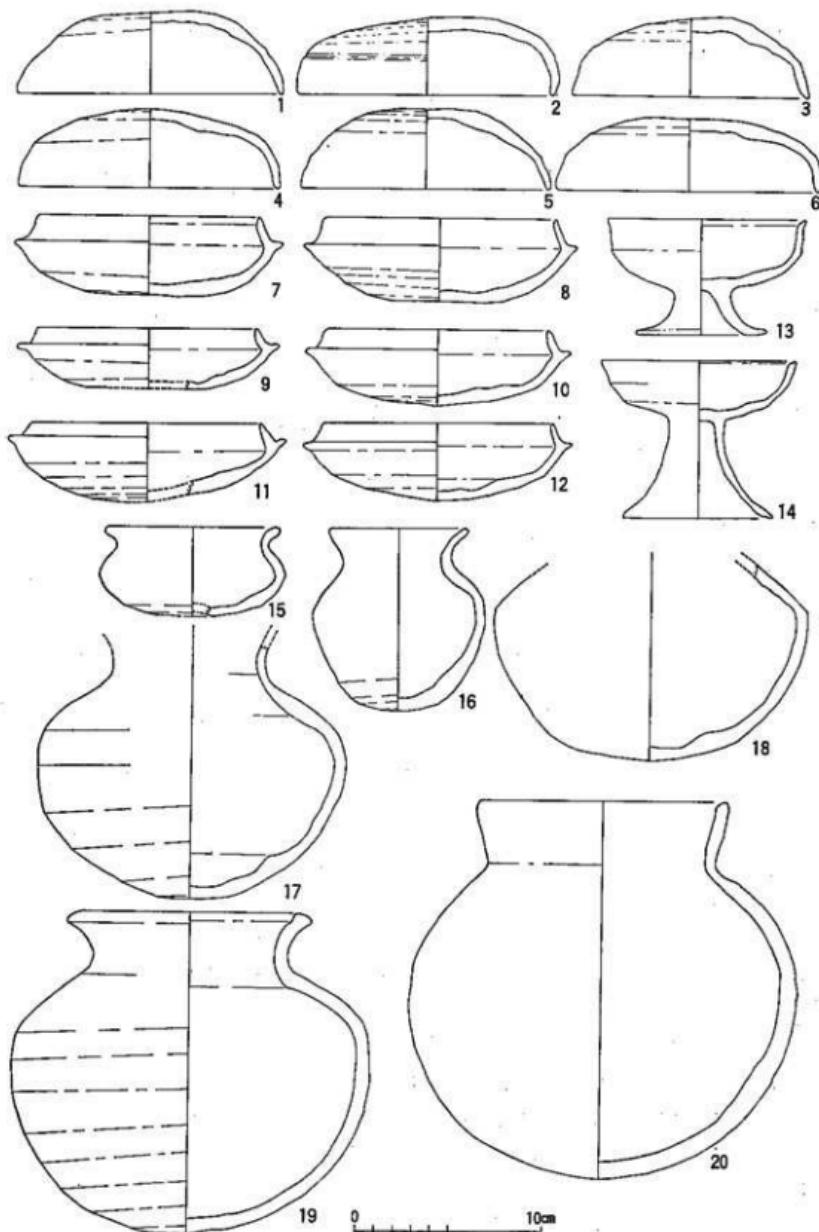


図5 2号墳石室出土遺物(1) (縮尺: 3分の1)

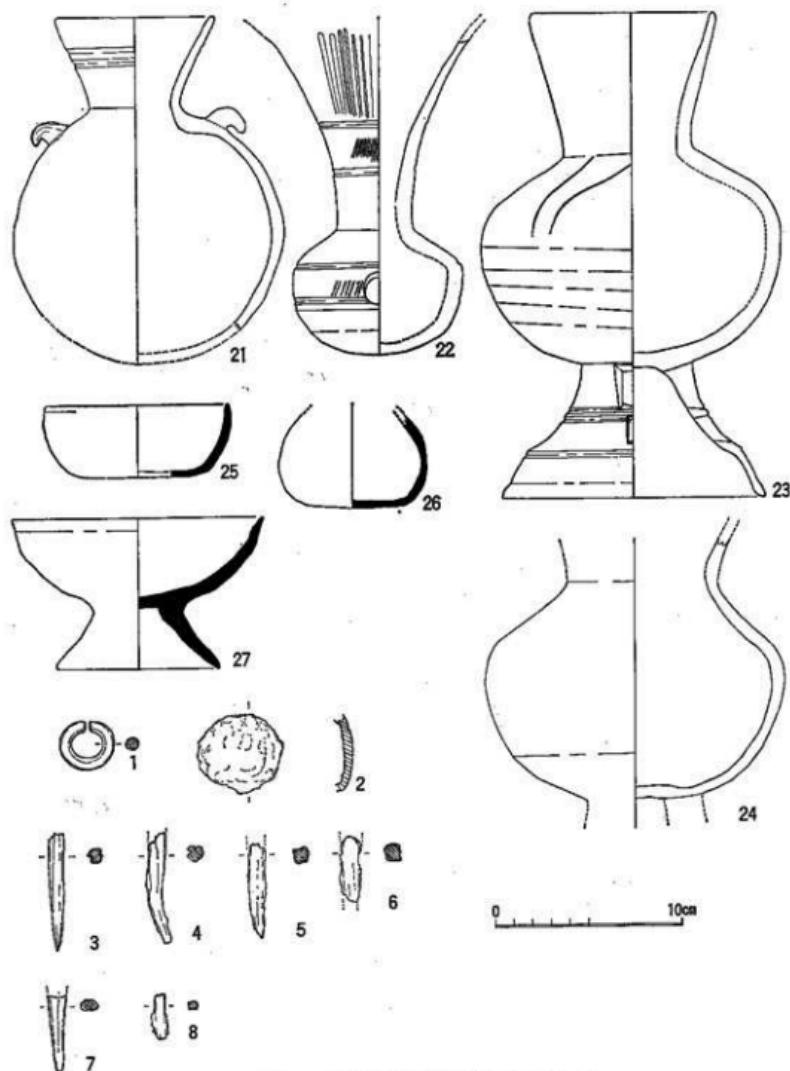


図6 2号墳石室出土遺物2(縮尺:3分の1)

土器取上 番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	外面調整	色調(内) (外)	胎 土	備考
1 9	蓋杯	14.2	4.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) オリーブ灰色 外) 暗灰灰色	細かく0.1~2.0mm大の石英、長石、チャート少量、0.2~1.0mm大の黒灰かぶり	
2 10	"	13.8	4.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青灰色 外) 青灰色	細かく0.5~3.0mm大の石英、チャート少量、コールタール状のもの多く付着	
3 16	"	12.0	3.1	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 淡オリーブ灰色 外) 淡オリーブ灰色	細かく0.1~3.0mm大の長石、石英をやや多く含む	
4 27	"	14.0	4.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 灰色 外) 青灰色	細かく0.1~5.0mm大の石英多く、0.1~0.5mm大の長石少量含む	
5 23	"	13.4	4.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明オリーブ灰色 外) 灰白色	細かく0.1~4.0mm大の石英、チャート少量、0.1~0.5mm大長石多く含む	
6 29	"	14.2	4.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) オリーブ灰色 外) 暗灰灰色	細かく0.1~3.0mm大の石英多く、長石少量含む	
7 9	杯身	11.8	4.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明灰色 外) 灰白色	細かく0.1~4.5mm大の石英、長石チャート少量、黒色コールタール状のもの多く含む	
8 10	"	12.4	4.5	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明青灰色 外) 明青灰色	細かく0.1~2.0mm大の石英、長石少量含む、コールタール状のもの付着	
9 [18 22]	"	11.5	3.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明灰灰色 外) 明灰灰色	細かく0.1~3.5mm大の石英、0.1~5.0mm大の長石やや多く含む	
10 [12 26]	"	11.7	4.1	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 灰明青色 外) 明青色	細かく0.1~2.0mm大の石英多く、0.1~1.0mm大の長石少量含む	
11 28	"	12.3	4.3	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) オリーブ灰色 外) 明灰灰色	細かく0.1~4.0mm大の石英多く、0.1~1.0mm大の長石を少量含む	
12 29	"	12.3	4.2	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 青灰色 外) 青灰色	細かく0.1~3.0mm大の石英やや多く、0.1~1.0mm大の長石少量含む	暗青灰色の鉛
13 15	高杯	10.6	6.2	回転ナデ	内) 暗白灰色 外) 暗白灰色	細かく0.1~1.0mm大の石英少、0.1~2.5mm大の黒い粒を多く含む	灰かぶり
14 4	"	10.4	8.4	回転ナデ カキメ	内) 明青灰色 外) 明青灰色	細かく0.1~3.0mm大の石英、長石少量含む	自然釉 がぶる
15 24	壺	9.3	4.8	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 暗青灰色 外) 暗青灰色	細かく0.1~1.5mm大の長石、石英少量含む	
16 5	"	7.5	9.6	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 灰白色 外) 灰白色	細かく0.1~2.0mm大の長石、少量含む	
17 8	"	16.5	13.7	横ナデ 回転ヘラ削り	内) 暗オリーブ灰色 外) オリーブ灰色	細かく0.2~3.0mm大の石英多量に、長石を少量含む	鉛、淡黄色
18 19	"	16.8	10.5	回転ナデ ケズリ	内) 黄白色 外) 灰白色	やや粗く0.1~2.0mm大の石英、長石、チャートやや多く含む	
19 3	"	13.0	14.1	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 灰白色 外) 灰白色	細かく0.1~9.0mm大の石英、長石多く0.2~1.0mm大のチャート、赤色酸化土粒少量含む	
20 1	"	13.4	20.1	ナデ、横ハケ、平 面タタキ、正格子目タタキ 形格子目タタキ	内) 白色 外) 淡黃色	細かく0.1~4.0mm大の石英、長石をやや多く含む	
21 11	提瓶	8.6	18.5	回転ナ デ、ヘラ削り	内) 灰白色 外) 次白色	細かく0.1~1.0mm大の石英をやや多く含む	
22 20	壺	10.7	17.4	ヘラ、回転ナ デ、削突窓	内) 青灰色 外) 淡青灰色	細かく0.1~2.0mm大の石英多く、3.0~5.0mm大のチャート少量含む	
23 2	脚付き 壺	10.0	25.9	回転ナデ ヘラ削り	内) 明青灰色 外) 青灰色	細かく0.1~3.0mm大石英多く、0.5~4.0mm大の長石少量含む	
24 7	"	16.0	12.9	回転ナデ 回転ヘラ削り	内) 明青灰色 外) 明青灰色	細かく0.1~4.0mm大の石英多く、0.1~1.0mm大の長石、チャート少量含む	
土器器							
25 32	杯身	9.8	3.8	ナデ	内) にぶい赤褐色 外) にぶい褐色	細かく0.1~1.0mm大の石英、赤色酸化土粒少量、微小の紫母を多量に含む	
26 13	壺	7.7	5.0	ナデ	内) にぶい褐色 外) にぶい褐色	やや粗く0.1~3.0mm大石英、長石多量、微小の紫母少量含む	
27 6	高杯	13.4	8.8	ナデ	内) 深褐色 外) 深褐色	細かく0.1~2.0mm大石英、長石少量、赤色酸化土粒紫母多く含む	

表2 平尾山2号墳

ち出され、奥壁部は残存していない。左側壁は3個、右側壁は7個の基底石が残存するのみである。石材は比較的大形の自然石を使用している。談道部は擾乱が激しく確認することができなかった。床面には人頭大の石が若干あり、敷石によって床をつくっていたようである。石室掘方の規模は、奥壁部で幅約2.7m、深さ約30cmである。

#### 遺物出土状態

石室が徹底的に破壊されていたにもかかわらず、副葬品は土器を中心として奥壁部近くにまとめて出土した。左側壁に近い部分では蓋杯が身とセット関係に

番号	種類	最長部 (cm)	断面部 (cm)	備考
1	金環	たて 2.6 よこ 2.9	直径 0.6	中実の金環
2	金銅製品	長辺 4.5 短辺 4.3		
3	釘 1	最長部 6.1	長辺 0.5 短辺 0.5	左下がりの 斜め木目あり
4	〃 2	5.9	長辺 0.6 短辺 0.6	横の木目あり
5	〃 4	5.0	長辺 0.6 短辺 0.6	継ぎの木目あり
6	〃 3	3.5	長辺 0.7 短辺 0.6	横の木目あり
7	〃 3	4.1	長辺 0.6 短辺 0.3	横の木目あり
8	〃 3	2.4	長辺 0.4 短辺 0.3	横の木目あり

表3. 2号墳金属製品

して置かれ、その背後にある壺(図5-17)や台付壺(図6-24)は口縁部と脚部が打ち砕かれている状況が見られ、復原作業によっても接合資料は見られなかった。この他の高杯や壺、脚付壺なども横倒はしているものの60×100cmの範囲の間に、原位置を保っていることが考えられる。種類は土器器高杯1点、小形壺2点、須恵器壺4点、長頸壺1点、台付壺2点、甌1点、小形高杯2点、蓋杯6点、杯身6点、提瓶1点である。このほか人骨、金環1点、金銅製馬具片、鉄釘6点などが出土した。

#### 出土遺物

蓋杯・身(図5 1-12) 体部はやや大形で天井部も高い。稜部の凹線が残る。杯身も丁寧な仕上げであるが、7の内面見込みには同心円文タタキが明瞭に見られる。

壺(図5 15-20) 15・16は小型、18は長頸壺と考えられる。17は口縁部全体を細かいピッチで打ち砕しているようである。

高杯(図5 13・14) 両方とも小型のタイプであるが形態を異にする。14は脚部にカキ目状の調整窓が見られる。

提瓶(図6 21) 小型のL字形をした把手を付けていて、体部も簡略化している。甌としては最終型式に近いものであろう。

甌(図6 22) 口縁部を欠いているが、外に大きく開く形態である。この個体についても口縁部を意識的に欠いているものと考えられる。

台付壺(図6 23-24) 24は17の壺と同様に口縁部を細かいピッチで打ち欠き、脚部も完全に欠いている。

金環(図6 1) 銅芯金張りの中実で断面は円形を呈する。長径2.9cm、短径2.5cmあり断面は径6.5mmである。

雲珠(図6 2) 金銅張りを施されているが、遺存状態は悪い。

鉄釘(図6 3-8) 長さ約6cm程度で断面方形を呈する小形の釘である。木質部が付着しているものも見られる。出土状況によって木棺の位置、法量を復原するまでにはいたらなかった。

#### 3 ま と め

以上が2号墳の調査の内容である。石室自体は徹底的に破壊されていたにもかかわらず、遺物は良好な状況で遺存していた。古墳の築造は6世紀中葉から後半にかけての時期に比定できよう。

## 5 長 楽 寺 跡 一福住町

### 1 は じ め に

天理市福住町2105番地、天理市立福住中学校の木造校舎改築に伴う長楽寺跡の調査を実施した。

長楽寺は、天理市史によると行基の開基と伝えられる寺であるが、創建年代は明らかではなく、明治7年に廃寺となつた。その後寺地は福住小学校、同中学校の敷地となった。

調査は6月12日開始し、同月24日に終了した。東西に並ぶ校舎の中庭にトレントを設定した。その他の校舎まわりは、空地がなく最少限の調査にとどまった。

### 2 調 査 の 概 要

調査トレントは、東西長約24m、幅2mのものを設定した。図1 基本層序（縮尺：20分の1）この結果表土下約1.1～1.4mにかけて炭化木片が多數出土し、その中に須恵器、土師器、瓦器、屋瓦の破片が含まれていた。

出土量は、整理箱1箱であるそして1.6mで地山面である灰黄色粘質土を検出した。

### 3 ま と め

以上の結果から、寺院建物に関連する遺構は検出されなかつたが、表土下約1.4mで、整地面が検出され、その中に鎌倉後期の土器片と瓦が多量に出土したこと、長楽寺が中世までさか上る可能性を示している。

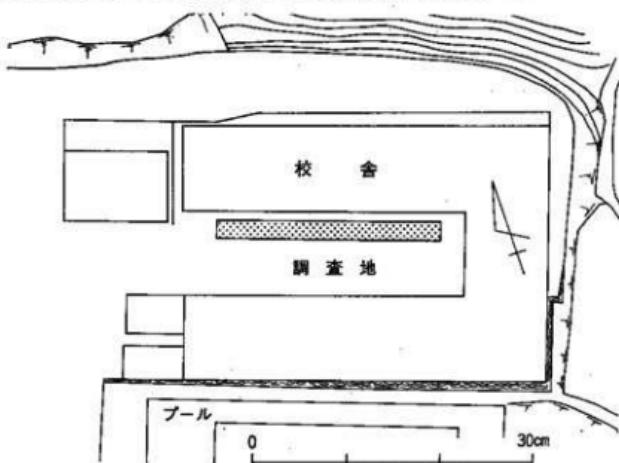


図2 長楽寺跡調査トレント

## 6 合場遺跡(第3次) —合場町

### 1はじめに

合場遺跡は、過去1・2次と連続したが、今回は都市計画道路の北側から布留川までの区間約53mが調査対象となった。調査は、昭和61年10月23日に開始し、11月19日に終了した。

### 2 調査の概要

調査区は南北の長さ53m、東西幅5mのトレンチを設定した。表土下約50cmで南北方向の素掘溝を7条検出した。幅10~30cm、深さ約10cmあり、瓦器・須恵器・土師器の破片が少量出土した。素掘溝の下層は、北約30mの間が砂堆積を示し、布留川の影響と考えられるが、遺構は検出できなかった。



図1 合場遺跡第3次調査地 (縮尺: 5,000分の1)

## 7 成願寺遺跡(第3次) —成願寺町

### 1 はじめに

天理市成願寺町の天理市立朝和小学校木造校舎改築に伴う成願寺遺跡の調査は、昭和61年6月27日から7月1日までと、昭和62年6月17日から2日間の2回に分けて実施した。いずれも中庭にトレンチを設定した小規模な調査である。

### 2 調査の概要

61年度分の調査は、東西19m、幅1.8mのトレンチである。この結果、表土下約50cmで地山面に達した。この下は1m掘り下げても砂の堆積が続いた。地形的には、東から西へ向けてゆるやかに傾斜している。

62年度分は、東西7m、南北3.5mのトレンチを設定した。上層から砂の堆積があり、2m近く掘り進めたが、遺構、遺物とも検出できなかった。

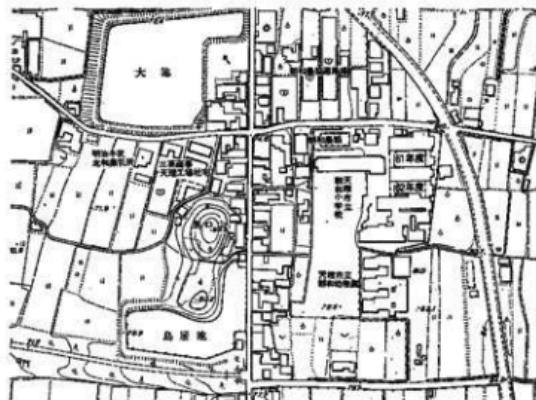


図1 成願寺遺跡61・62年度調査地（縮尺：5,000分の1）

## 8 西殿塚古墳後円部隣接地—萱生町

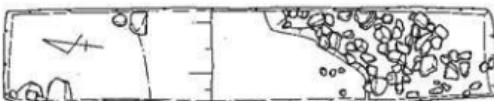
### 1はじめに

西殿塚古墳は、全長約220mの前方後円墳であり、手白香皇女衾田陵として御陵墓となっているが、後円部の北側に隣接する民有地の開発に伴う発掘届が提出された。敷地は東西約11m、南北約14mであるが、排土の関係もあって、中央部に南北の長さ11m、東西幅5mのトレンチを設定した。

調査は昭和61年11月21日から開始し、11月26日に終了した。



図1 西殿塚古墳後円部隣接地調査地 (縮尺: 5,000分の1)



### 2 調査の概要

調査の当該地は水田であったようだ、表土下約40cmまでは耕作土の堆積がみられた。さらにこの下

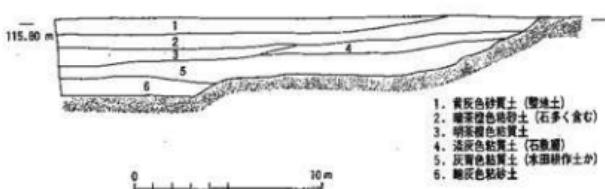


図2 調査状況図 (縮尺: 200分の1)

層約20cmで集石群がみられた。この集石は、地山面との間層に土器を伴う土層が一層みられるところから、自然の散乱である可能性が強い。

また、トレンチ南端から約3mの地点で、北へ向かって自然傾斜となるため、古墳に伴う壙状の施設はないものと考えられる。遺物は出土しなかった。

## 9 鍋割古墳—園原町

### 1 はじめに

昭和62年3月17日に天理市水道ガス局より園原町の新池西側の水道工事現場において、石室を破壊し、土砂の中から鉄製品が出土したとの連絡を受けた。しかし、当該地は遺跡地図でも古墳とマークされておらず、しかも池の下流では谷状地形を呈していた。このため取り急ぎ現場の状況を確認するために同日工事当該地へ赴いた。

### 2 遺跡の環境

現地は大型重機によって、旧状を復原することがほとんど不可能なくらい破壊されていた。そして、長径2m以上の自然石が2~3個露出していた。周辺の状況から、柿畠であったようで、この地が少し墳丘状に隆起していたようである。これは図1にもコンターラインによって窺われる。そして、掘り出された土砂の中からは、さらに鉄製品の破片や須恵器片などが採取でき、ここに古墳（石室を内部主体とする）が存在したことが容易に理解できた。同日午後に重機と手掘りによって

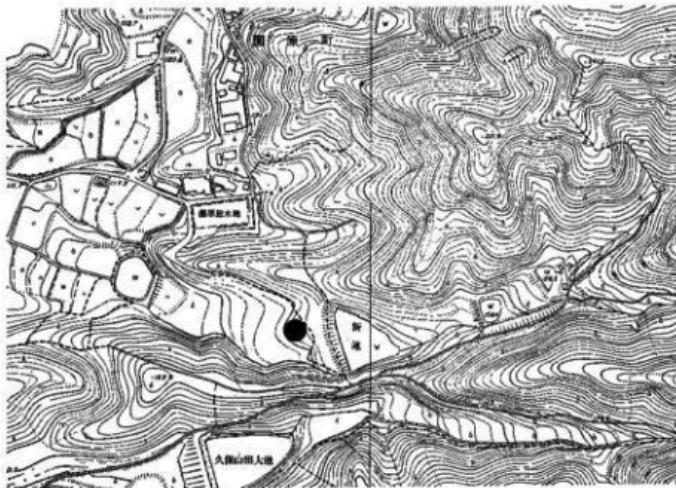


図1 鍋割古墳位置図（縮尺：5,000分の1）

墳丘の中心部と考えられる地点を精査したが、すでに地山面が露出し石室の基底部も残存していなかった。このため、内部主体は横穴式石室と推定されるが、規模、開口方向などは明らかにできなかった。

当古墳は地籍名を押借して鏡割古墳とした。立地は、西乘駒古墳の東約800mの地点にあたる。当古墳の周辺尾根筋には小古墳がいくつか散在しているが、厳密な踏査は実施されておらず、完全に古墳が破壊されてしまったことは、今後の文化財行政に対して大きな課題である。特に山麓の畑地、果樹園などに開墾が進んだ地域における古墳の確認が必要になってきた。

### 3 遺構

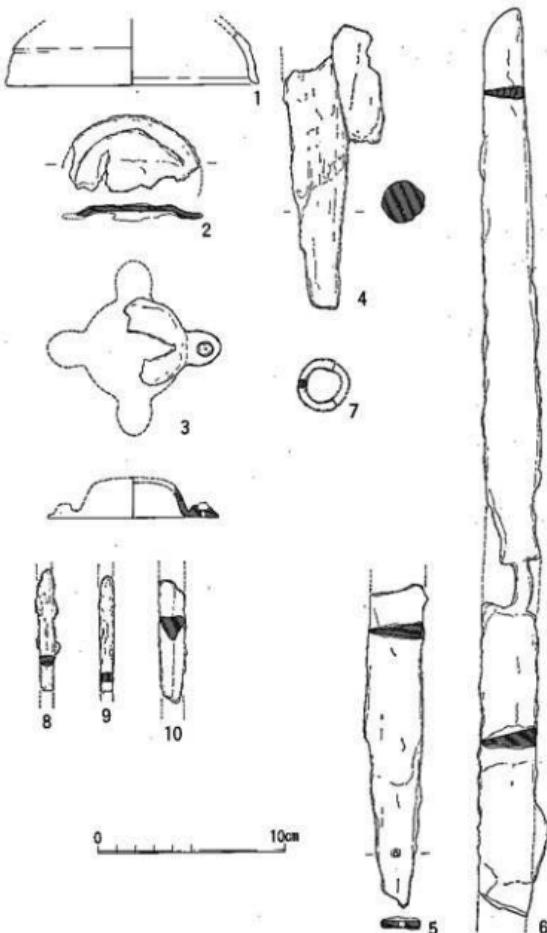


図2 鏡割古墳出土遺物（縮尺：3分の1）

古墳の立地は、急峻な尾根に挟まれた谷筋で東側には新池など3カ所に溜池がつくられている。しかし、図1の地図を参照すると、古墳は北側の主尾根から南へ枝分れした支尾根が確認され、この突端部に古墳が築造されていたことが推定できる。地形図のコンターラインの膨らみや現地の微少な隆起の範囲の計測では、直径20m以上の規模が復原できよう。

## 4 出 土 遺 物

現地で採取できた遺物は土器類と鉄製品である。須恵器は3点あり、いずれも蓋杯の破片である。Ⅲ型式前半と考えられる。土師器片は6点あるが中世以降の皿形土器である。鉄製品は20点程度出土した。

2は座金具と考えられるが鉸具の取付け部は失われている。3は辻金具である。径約5cm、高さ2cmの円形中空座が推定できよう。そして十字形の足金具を付ける。足金具は長さ1.9cm、幅1.8cmで中央に1個の鉢がある。足金具は他に2点出土している。7は円形の鉸具と考えられる。以上が馬具類の破片である。4は鉄製鉢の石突部である。銹化した他の鉄製品が付着している。石突部は現存長約13.5cmあり上端は袋底部が見られる。直径は約3cmである。5・6は鉄刀である。1個体であろうと思われるが接合できない。6は現長約50cmで平棟平造である。刀幅2.5cmあり刀身の一端には鞘木の木質部が見られる。茎は現長17cmあり目釘孔が1か所見られる。8・9は鉄鎌と見られる。柳葉形に属すると思われるが銹化が著しい。10は断面三角形を呈する。一辺約1.3cmであるが用途不明。

## 5 ま と め

以上が鍋割古墳で採取できた遺物である。鉄製品が比較的多く遺存しており、馬具・武器などの所有が明らかになったことは、当地域の中でも被葬者を推定する上で重要な遺物である。当地域の古墳はこれまでほとんど調査されたものではなく、破壊されてしまったとは言え、注意すべき古墳であろう。なお築造時期は、1の須恵器より6世紀前半に比定できよう。

昭和 62 年度

# 1 柳本藩邸跡（第3次）—柳本町

## 1はじめに

柳本小学校内における、柳本藩邸跡関係の調査は第3次にあたる。今回は、北側にあった木造校舎の解体作業の終了を待って実施した。この区域はプールの建築が予定されており、このための事前調査となった。調査区は東西17m、南北7mを設定した。建築予定面積の1/3程度であるが、西および北側が学校敷地外となり、また前年に試掘した結果深さが約3mとかなりの土量が予測されたため、やや広い土置場を確保したためである。調査は昭和62年5月11日 начиная, 6月26日に現場作業を完了した。

1
2
3
4
5
6

図1 基本層序  
(縮尺: 80分の1)

## 2 調査の概要

前年に重機によって地山面までの深さが3m以上あり、この間には基本的に3層に堆積土が分層できることを把握していたため、この基本土層面ごとに造構面として精査を実施した。しかし、建物跡、井戸などは検出することができなかった。

堆積層は3層に分層



図2 柳本藩邸跡第3次調査地 (縮尺: 5,000分の1)

できたが、下層まで幕末の日常雑器が出土した。このことは、大規模な整地が行われたことを物語っている。調査区の東では、地山面を基盤として石組みを一部検出したが、調査区は拡張していない。

## 2 小墓古墳（付西乘鞍古墳立会）—柏之内町

### 1 はじめに

小墓古墳は天理市柏之内町小墓ほかに所在する全長80m程度の前方後円墳である。この古墳の東に隣接する天理市柏之内浄水場の拡張計画に伴って周濠部の事前調査の依頼が水道ガス局から提出された。当該調査地は、面積約1,000m<sup>2</sup>あり、その上排土置場が確保できない状態であったため、2回に分けて発掘調査を行った。調査は昭和62年9月7日に開始し、昭和63年2月10日に終了した。しかし、出土遺物が膨大になり、整理作業が進んでいないため簡単な概要に留める。

### 2 遺跡の立地

当古墳の東約200mには全長約120mの西乘鞍古墳があり、さらに東約450mには全長約72mの東乘鞍古墳がある。これらは同一丘陵上に築造されており、小墓古墳は丘陵端部に位置しているよう



図1 小墓古墳および西乘鞍古墳調査地（A・B）（縮尺：5,000分の1）

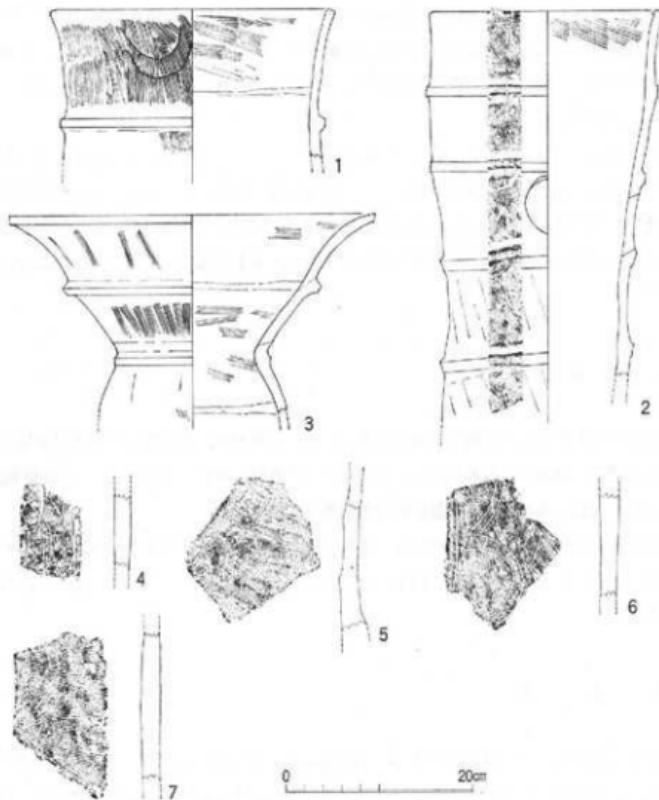


図2 小墓古墳出土埴輪(縮尺: 3分の1)

である。また、北約150mには焼戸山古墳があったが、消滅してしまった。以上のようにみると、古墳時代後期の前方後円墳3基以上で構成された群をつくっている地域である。

小墓古墳の現状は全長約80mで東北—西南方向に主軸を置く前方後円墳で、後円部の裾部が相当改変を受けている。しかし、周濠は水路や里道、駐畔に良く遺存している。

調査当該地内は後円部東側部分にあたるが、敷地いっぱいに濠跡が検出されることが予想できた。

### 3 調査の概要

周濠内の堆積は、上・中・下層の3層に大別できる。上層は近世以降のものでブロック状にはい

る。墳丘削平の整地土層と推定される。中層は約1.5mと非常に厚い堆積を示している。灰色のグライ士壇で長期間にわたる自然堆積であろう。埴輪の破片を多量に包含していた。下層は30~50cmの厚みがある有機質土の堆積である。木枝などの腐食はあまり進んでいない。木製品がはいっている層で古墳時代の堆積層である。

検出した遺構は、後円部基底部と周濠が延長約40m分である。周濠内には土坑や、柱穴も検出できた。また墳丘削平跡からは、古墳築造以前の土坑群と溝を検出した。北区からは中世以降の井戸1か所を検出した。このうち濠の規模は、幅が12~13m、深さは現水田面から約2.8mを計る。削平された後円部の墳丘は幅が約5m程度あるところから、本来の規模は全長約85m以上と考えられる。

#### 4 出 土 遺 物

周濠内から出土した遺物は埴輪と木製品が大半を占め、須恵器、土師器は小破片で少量であった。埴輪は、普通円筒、朝顔形、蓋形のはか、武具としては盾形、鞍形などがあり、人物埴輪、動物（馬、鹿など）、水鳥、鶏形埴輪、家形埴輪などが多量に出土した。

木製品では、蓋形65点（内6点が完形）、盾形1点、刀形1点、さしづ形1点、鉢形1点、木棺2点、柾1点、火切臼1点、耳杯形容器1点などのほか、木柱状のものや枕状に加工された木製品が出土した。

#### 5 ま と め

当該調査地は周濠全体の面積では約6分の1程度にしかすぎないが、埴輪の種類も多く、またそれ以上に大量の木製品が出土したことは注目される。小墓古墳の築造時期は6世紀前半ごろに比定できるが、西乘鞍古墳などとの先後関係は報告書によりたい。

##### （付） 西乘鞍古墳隣接地と立会調査

古墳の北側隣接地におけるトイレ設置予定地を1辺2m程度事前調査した。（A地点）この結果、表土下から弱粘性のグライ土壇で遺構、遺物とも出土しなかった。また、墳丘裾部西側の排水施設に伴う立会調査も同時に行った。工事は幅約50cm、深さ50cm程度のトレンチ掘りである。遺構は確認されなかつたが、埴輪片、瓦器片などが出土地した。



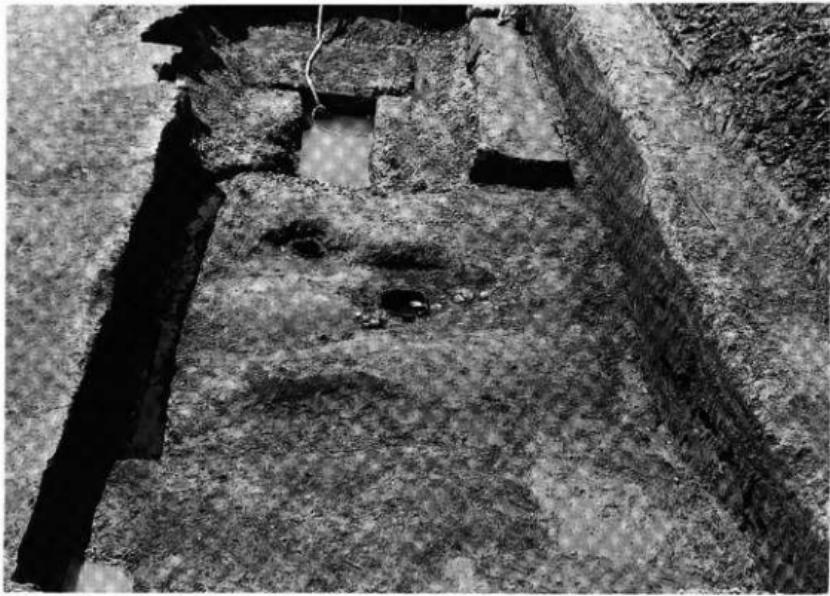
1号墳全景（南方から）



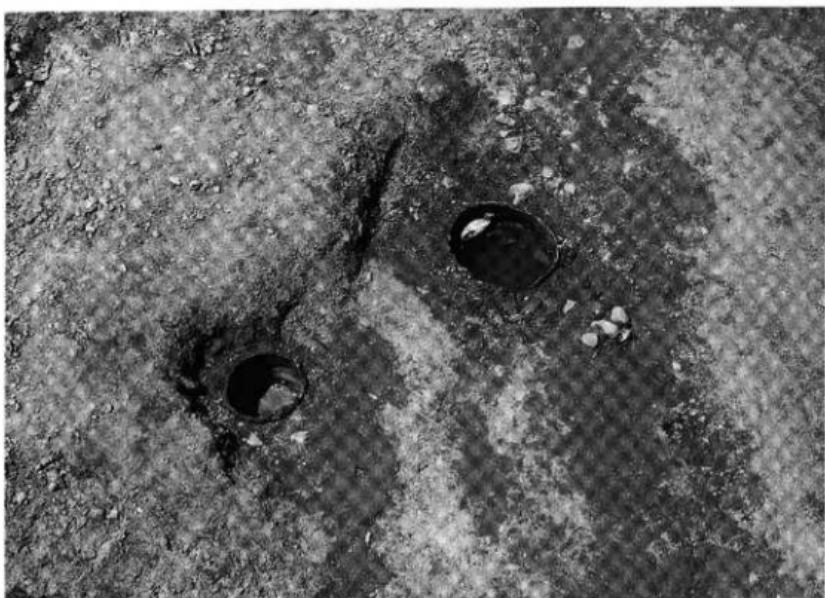
1号墳全景（西方から）



第1調査区 中・近世素掘り溝（南方から）



第1調査区 SD-01（北方から）



第1調査区 井戸(右,井戸-1,左,井戸-2,北方から)



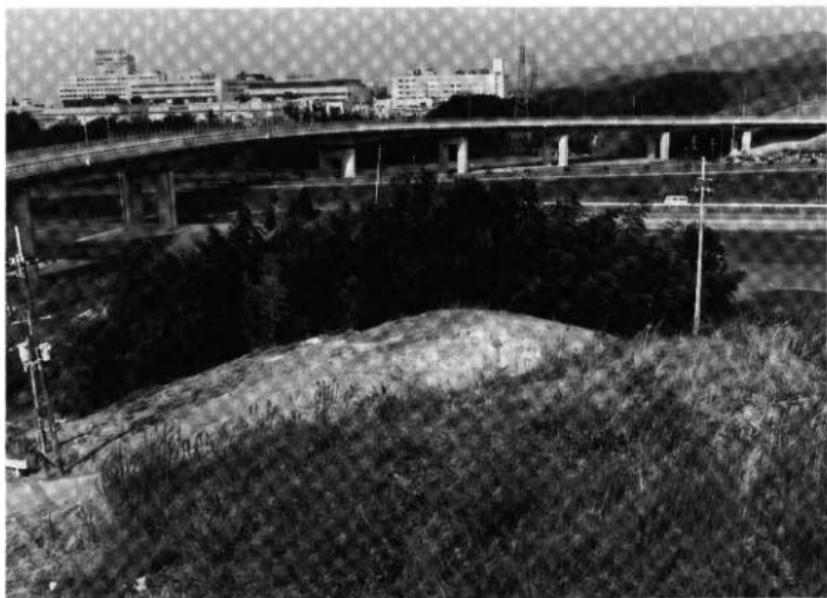
第1調査区 SD-01掘り下げ風景(南方から)



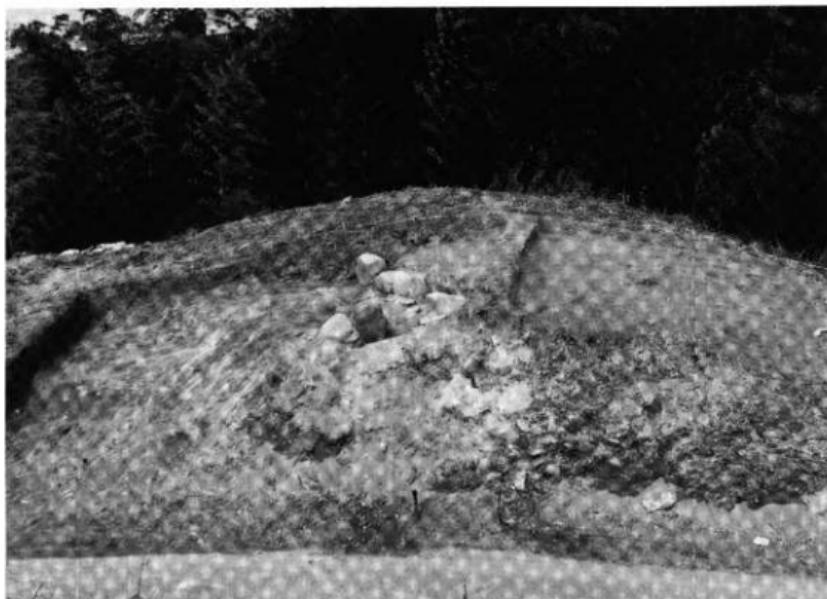
1. 遺構検出状況



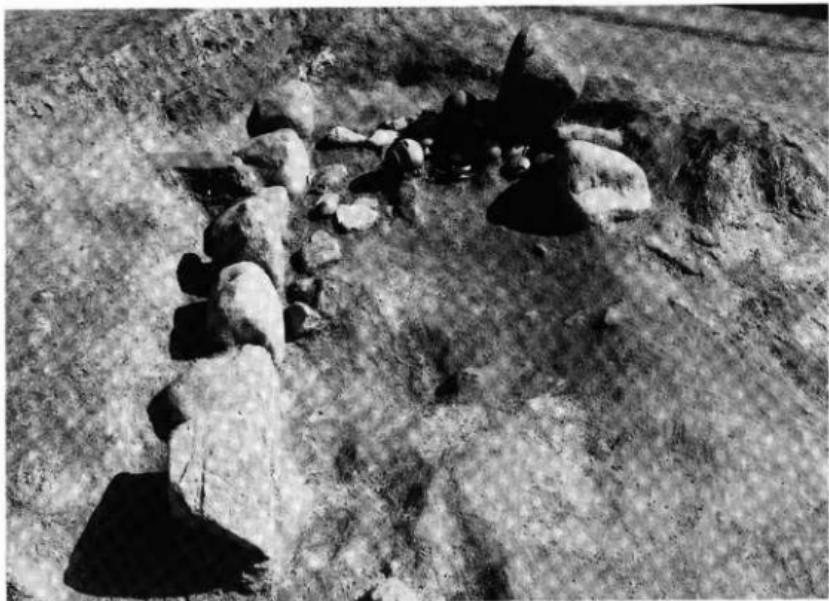
2. 土器の出土状況



1. 2号墳遠景（手前は1号墳）



2. 2号墳石室検出状況



1. 横穴式石室検出状況



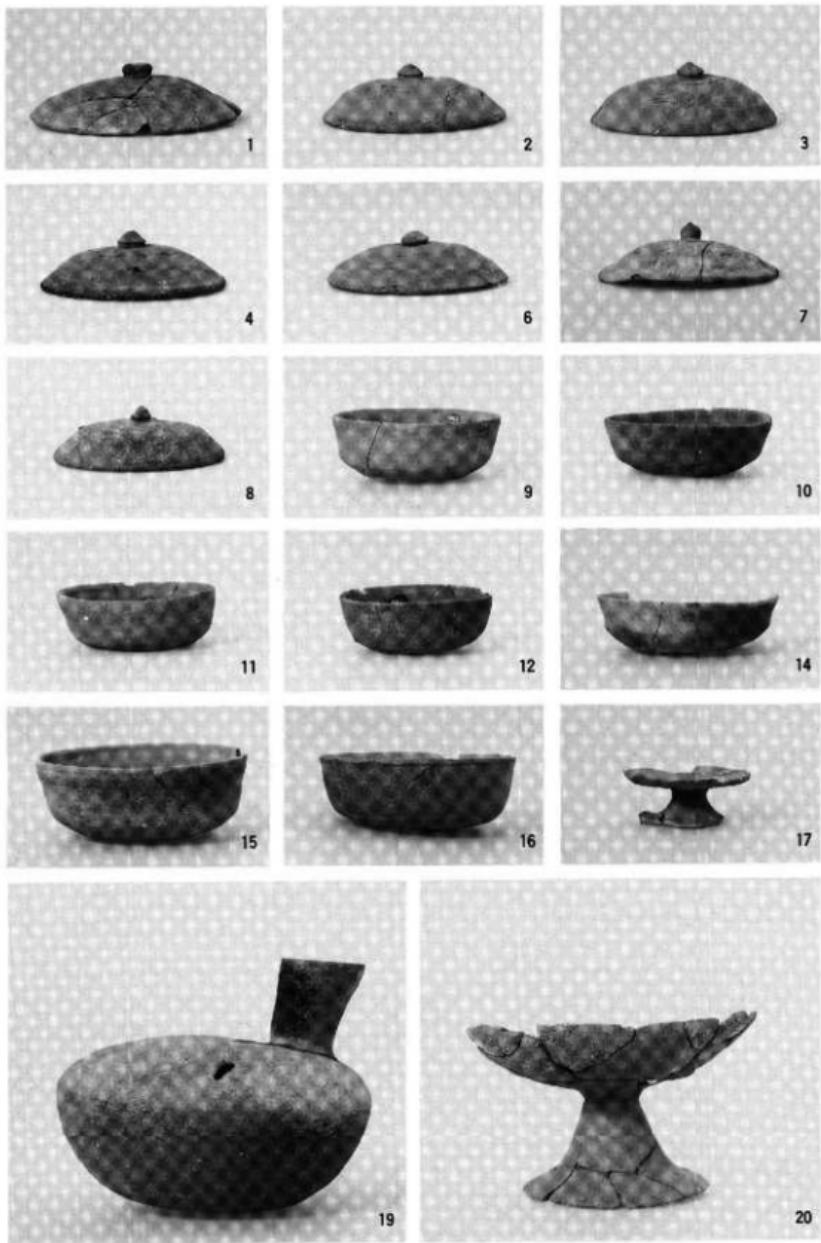
2. 土器の出土状況

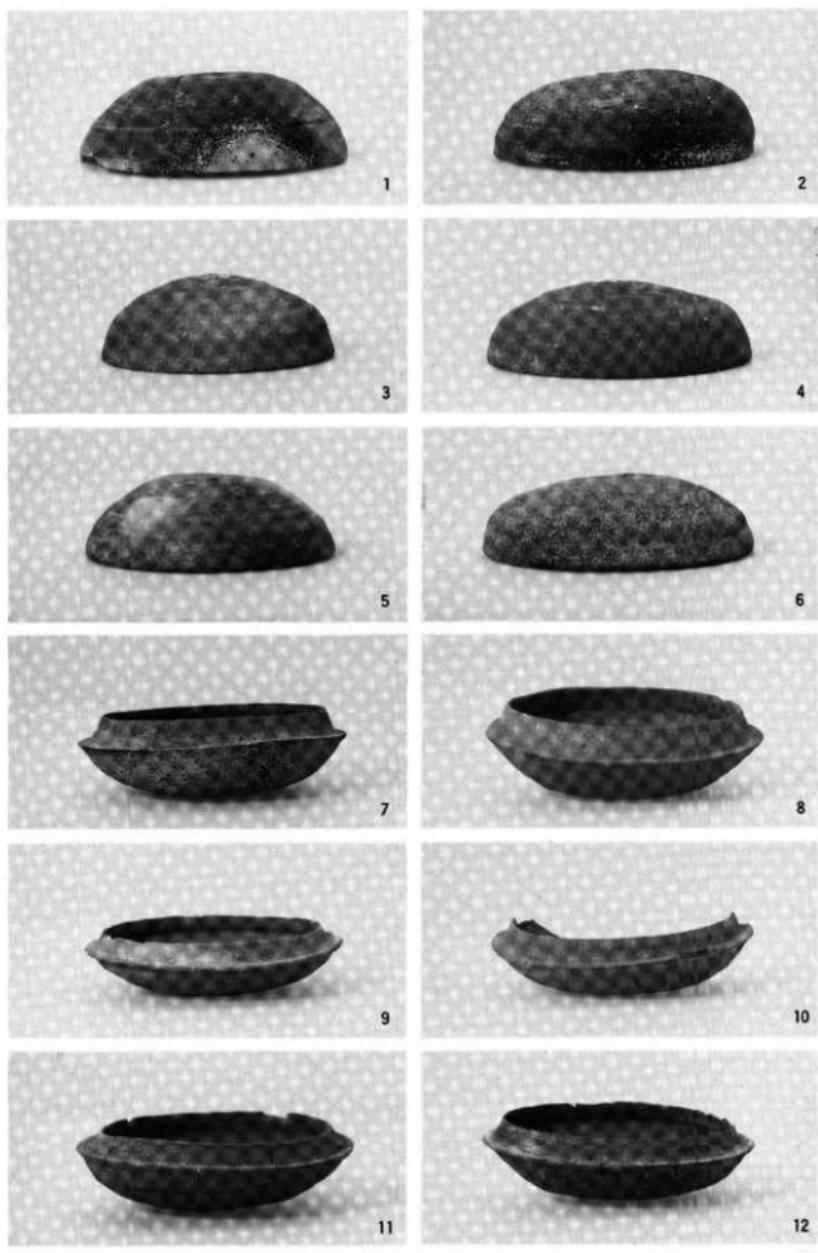


1. 土器の出土状況

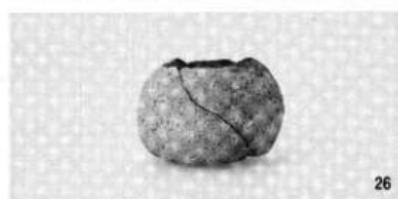
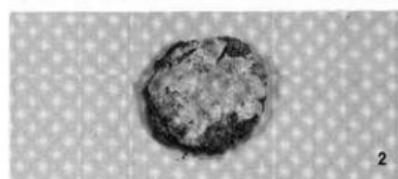
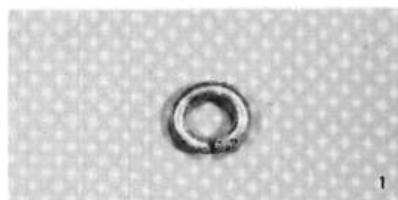


2. 土器の出土状況

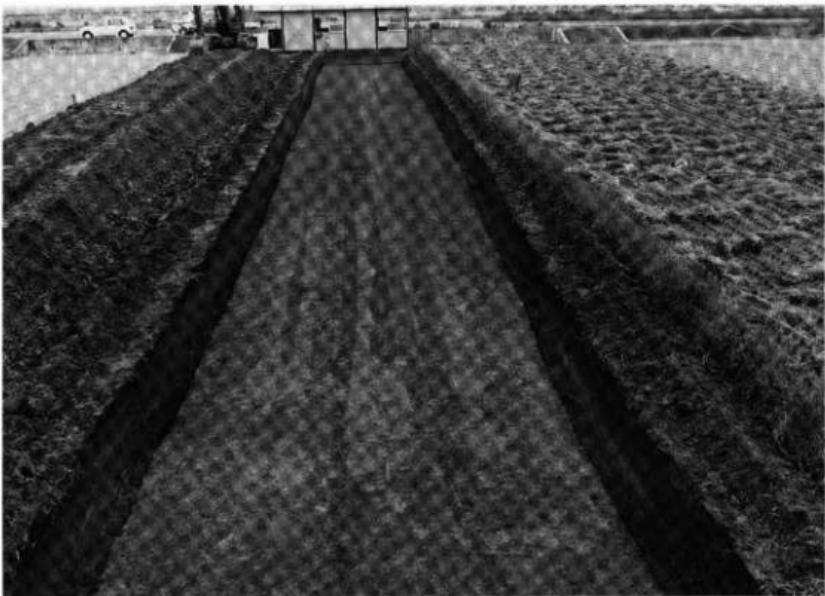








(1・2—½, 他は½)



1. 調査地



2. 造構検出状況



1. 調査トレンチ



2. 断面状況



1. 調査状況



2. 断面状況



1. 遠 景 (南から)



2. 近 景 (東から)



1. 調査前状況



2. 調査状況